

令和 7 年 6 月 24 日現在

機関番号：21201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K10940

研究課題名（和文）拳児を希望する有配偶女性に対するリプロダクティブライフプランニング支援の構築

研究課題名（英文）Reproductive life planning support for married women who wish to have children

研究代表者

アンガホッフア 司寿子（Angerhofer, Shizuko）

岩手県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：30381304

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：子どもを希望する有配偶女性の生殖のライフプラン達成への支援のため、妊娠のしやすさの知識や自身の身体的評価を明らかにすることを目的とした調査を行った。20～40代の子どもを希望する有配偶女性104名対象の質問紙調査では、妊孕性と年齢の関係、性感染症や肥満の妊娠への影響の知識は高い一方で、葉酸摂取や風しんワクチンなどプレコンセプションケアの内容は「わからない」という回答が多かった。結婚1年未満の女性3名のインタビューでは、妊娠に向けた生活習慣の見直しを試みていることがわかった。また夫や自身の状況から妊娠の難しさや不妊治療を意識しつつも、自然妊娠を理想としている思いが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

有配偶女性は、妊孕性に関する知識や妊娠に向けたところがけへの意識が高い一方で、プレコンセプションケアに関する知識が低い点や、不妊治療を意識していても自然妊娠を理想している点など、妊娠の先延ばしに影響する要因が潜在的にあることが明らかになった。有配偶という状況にあることで、妊娠への意識が高いという特徴を強みにしつつ、専門家からの正しい知識や助言が、生殖のゴール達成への後押しとなる可能性が示唆された。また、既婚ということで、自身および配偶者の状況の影響の大きさを理解した支援が求められることが明らかになった成果は意義が大きいといえる。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted to clarify the fertility knowledge and own physical assessment of fertility among married women who wish to have children, in order to support them in achieving their reproductive life plans.

A questionnaire survey of 104 married women in their 20s to 40s who wished to have children revealed that while knowledge of the relationship between fertility and age, and the effects of sexually transmitted diseases and obesity on pregnancy was high, many participants were “unsure” about the details of preconception care, such as folic acid intake and the rubella vaccine. Interviews with 3 women who had been married for less than one year revealed that they were attempting to review their lifestyle habits in preparation for pregnancy. They were also aware of the difficulty of conceiving and fertility treatment due to their husbands' and their own conditions, but natural pregnancy was their ideal goal.

研究分野：ウイメンズヘルス

キーワード：リプロダクティブライフプラン 既婚女性 妊孕性

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

女性の社会進出による晩婚・晩産化が進んでいる。第1子出産時の母親の平均年齢は上昇を続け、**2015**年には**30.7**歳となった(厚生労働省、**2018**)。また**2018**年の合計特殊出生率は**1.42**と**3**年連続の低下をたどり(厚生労働省、**2019**)、少子化に歯止めがかからない現状である。

内閣府の報告(**2014**)によると、女性の妊孕性が**35**歳前後からだんだんと下がり始めることについては、**9**割を超える女性が知っていると答えているのにも関わらず、子どもを持つ理想の時期として既婚女性を含めて**6**割以上が「結婚してから、ある程度時間をおいてから子どもを持つ」と回答している。同様に米国で実施された大規模な調査「**In The Know: Fertility IQ 2011 survey**」においても、対象となった**25**歳から**35**歳の女性は、更年期の**10**年以上も前の段階で妊孕性の低下が起こることや、年齢による不妊のリスクについては認識を持っているのにも関わらず、不妊治療にどんなものがある、年齢によって治療成功率が下がることについては認識が低く、そこに知識のギャップがみられたとの報告があった。つまり現代女性は、年齢によって妊孕性が低下するということは漠然と耳にしている、どこかで自分自身は欲しいときに子どもができるだろう、自分に限って妊娠できないことはない、という潜在的な意識があり、現実とのギャップを生じている可能性がある。

実際、結婚した夫婦が実際に持つつもりの子どもの数(予定子ども数)は**2.01**であるのに対し、夫婦の完結出生時数(最終的な平均出生子ども数)は**1.94**と**2**人を下回っており、子ども**1**人の夫婦の数が増加している(国立社会保障・人口問題研究所、**2017**)。このことは、女性が希望の生殖のゴールが達成できていない可能性があり、その背景に妊娠の先延ばしの考えが影響している可能性が推測される。既婚女性の妊娠の先延ばしの考えには、不妊の心配をしていないこと、また何歳まで自分は子どもが産めるかの考えの年齢と実年齢の差が大きいことの影響が研究者の調査で明らかになっている。

本研究の対象は、子どもを持つ計画が具体的になる有配偶女性に焦点を置く。その背景として、日本は欧米諸国に比較し、非嫡出子の割合が大変少ないという特徴があり、出生するほとんどの子どもは有配偶女性から産まれている。そこには、結婚してその後子どもを持つ、という順番性を重視する日本の文化の影響がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、子どものいない挙児を希望する有配偶女性において、妊娠・出産そして不妊に関してどれくらい正しい知識を持っているか、自分の身体的状況の評価とどのように関連しているかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

1) 子どもを希望する**20-40**代の女性の妊孕性に関する知識知識およびリテラシーの実態を明らかにする。

- (1) 対象** 子どもを希望する**20-40**代の女性 **322**名
- (2) データ収集方法** オンライン調査
- (3) データ収集期間** **2021**年**3**月
- (4) 調査項目** 妊孕性知識・リテラシー尺度の質問項目、家族形成(未婚/既婚、挙児希望数)、キャリアプラン(出産後のキャリア継続)
- (5) 分析方法** 妊孕性知識・リテラシー尺度の群間比較を統計学的に分析した。
- (6) 倫理的配慮** 所属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

2) 結婚**1**年未満の未産の有配偶女性が、妊孕性(妊娠・出産および不妊)に関する知識と生殖のライフプランをどのように考えているかを明らかにする。

- (1) 対象** "いきいき岩手"結婚サポートセンター **i-サポ**の令和**5**年度ライフプランセミナー「産む・産まないを含めた生殖の人生設計と女性の健康」を受講し、インタビューの参加に同意した女性**1**名、および便宜的サンプリングで同意を得た**2**名
- (2) 研究デザイン**: 質的記述的研究
- (3) データ収集方法**: 半構造化インタビュー
 - i.** プライバシーの守られる個室で実施した。
 - ii.** インタビューは**30~60**分程度の**1**回とし、内容は同意を得てICレコーダで録音をした。
- (4) データ収集期間** **2023**年**8**月~**2024**年**7**月
- (5) インタビュー内容** 妊娠・出産について現時点の考えや計画、将来の妊娠・出産に向けてこころがけていること、女性や男性の健康状態が将来の妊娠・出産に影響することについて、女性の健康や妊娠・出産に関して、どのような情報に関心があるか
- (6) 分析方法**: 録音されたデータから逐語録を作成し、妊孕性の知識、生殖のライフプランに分けて、関連する内容をコード化およびカテゴリー化した。
- (7) 倫理的配慮** 所属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

1) 子どもを希望する 20-40 代の女性の妊孕性知識およびリテラシー

分析対象は 322 名の女性で、平均年齢 33.7 7.4 歳、67.7 %が未婚、80.7 %が就労していた。既婚者のほうが、[適切な妊孕性に関する情報を入手し、正しく理解することができる能力] $p=0.037$ および [男性の生殖能力に影響する物理的リスクに関する知識] $p<0.001$ が有意に高かった。また挙児希望数を 1 人と回答したものが、2 人以上としたものより [妊孕性に関して得た情報から自分の状況に当てはめ、リスク判断することができる能力] が有意に高かった $p=0.005$ 。さらに、児出生後も就業継続の意思があるほうが、ない女性よりも [女性の妊孕性に影響する年齢と疾患に関する知識] が有意に高かった ($p=0.032$)。

| | |
|-----------|---------------|
| 平均年齢 | 33.7±7.4 歳 |
| 婚姻状態 (未婚) | 218 人 (67.7%) |
| 就労状況 (あり) | 260 人 (80.7%) |
| 希望子ども数 | 1.79±0.6 人 |

図 1. 対象の属性

| | | 未婚 | 既婚 | |
|----------|--|------|------|-----|
| 妊孕性知識 | 女性の妊孕性に影響する年齢とリスク因子に関する知識 | 79.5 | 79.3 | |
| | 男性の生殖能力に影響する物理的なリスク因子に関する知識 | 22.4 | 42.9 | *** |
| | 男性の生殖能力のリスクとなる生活習慣に関する知識 | 67.6 | 65.6 | |
| | 男性の性機能と生殖能力に関する知識 | 56.4 | 56.7 | |
| 妊孕性リテラシー | 自分の生殖の状況について必要な時に支援を求め、コミュニケーションをとることができる力 | 22.3 | 22.9 | |
| | 生殖に関する適切な情報を入手し、正しく理解する力 | 18.7 | 19.8 | * |
| | 生殖に関する情報を自分の状況に当てはめ、リスク判断する力 | 9.6 | 10.1 | |
| | 将来の妊娠のために意思決定をして行動に移す力 | 10.0 | 10.1 | |

図 2. 未婚女性と既婚女性の比較

結婚をしたことで、挙児を現実的に考えることが妊孕性の情報収集と理解につながっている配偶者 (男性) の妊孕性の (物理的) リスクに関心を持ち知識を得ている

2) 結婚 1 年未満の有配偶女性の妊娠・出産に対する思いや考え

(1) 参加者の属性

女性 3 名はそれぞれ 20 代、30 代 40 代から 1 名ずつ、夫はすべて 30 第であった。結婚期間は 4 か月～6 か月で、うち 2 名に婦人科既往歴があった。

(2) [妊孕性の知識] 18 コード 5 カテゴリーが抽出された。

(3) [生殖のライフプラン] 22 コード 5 カテゴリーが抽出された。

女性は妊娠に向けたからだづくりや生活習慣の見直しを試みており、特に葉酸摂取についてはその必要性を知識として持ち、実際行動に移していた。有配偶で、妊娠のタイミングを具体的に考慮しているという特徴が 行動につながっていると考えられる。また自身の年齢や夫の精液所見など、自然妊娠の難しさに直面している状況であっても、根底に自然妊娠への期待があり、不妊治療は次の手段という考えがみられた。このことは、不妊治療の必要性や結果的に子どもができない可能性をどこかで意識はしているものの、それでも自然に妊娠できることが理想であるという思いは強いことが考えられる。

子どもができにくいかもしれないが、いずれ持ちたい、というライフプランの希望はありながらも、自身や夫の置かれた状況の影響の大きさが推測された。妊孕性や不妊の知識はあり、妊娠に向けた生活のこころがけをしても、ライフプランには自身や配偶者の社会的状況の考慮をしていることを理解した健康教育や支援が求められると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 アンガホッフア司寿子、中村康香、山口典子、武石陽子、川尻舞衣子、吉田美香子、吉沢豊予子 |
| 2. 発表標題 子どもを希望する生殖世代の女性における家族形成およびキャリアプランと妊孕性リテラシーの関連 |
| 3. 学会等名 第66回日本生殖医学会学術講演会 |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 吉沢 豊予子 (Yoshizawa Toyoko) (80281252) | 関西国際大学・保健医療学部・教授 (34526) | |
| 研究分担者 | 中村 康香 (Nakamura Yasuka) (10332941) | 山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授 (21501) | |
| 研究分担者 | 吉田 美香子 (Yoshida Mikako) (40382957) | 東北大学・医学系研究科・教授 (11301) | |
| 研究分担者 | 武石 陽子 (Takeishi Yoko) (00586505) | 東北大学・医学系研究科・助教 (11301) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------------------|--|---|----|
| 研究 分 担 者 | 川尻 舞衣子 (Kawajiri Maiko) (70815852) | 東北大学・医学系研究科・助教 (11301) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |